旭陵会だより

題字は杉山仁校長先生

――発行者――
岐阜県立
中津高等学校同窓会

末松安晴氏
東工大学長に就任

中津高校第二回卒業生で坂下町出身の末松安晴氏が平成元年十月二十四日東京工業大学学長に就任されました。氏は昭和二十六年四月本校普通科を卒業され、東工大工学部へ進学されました。光通信の世界的権威者であります。

中津高等学校第二回卒業生の末松安晴博士（五十七才）が東工大学長に就任されました。平成元年九月に行なわれた東工大学長選挙に当選され同年十月二十四日末松学長が誕生したものであります。末松学長の任期は四年間。恵那郡坂下町の御出身であり、昭和二十六年三月中津高校卒業、同三十年三月東工大工学部電気工学コース卒業、同三十六年九月同大学院理工学（工学博士）修了、同四十八年十月工学部電子物理工学科教授、同六十一年四月工学部長就任ましたものの現代は電流と東工大での研究と指導大学長選挙に当選され同の毎日でありました。研年十月二十四日末松学長研究テーマは光通信の研が誕生したものであります。末松学長の任期は四年間。恵那郡坂下町の御出身であり、昭和二十六年三月中津高校卒業、同三十年三月東工大工学部電気工学コース卒業、同三十六年九月同大学院理工学（工学博士）修了、同四十八年十月工学部電子物理工学科教授、同六十一年四月工学部長就任ましたものの現代は電流と東工大での研究と指導による通信がその主流をしめてきました。一九六〇年レーザが発明されて以来通信の搬送波として応用する事が考えられました。そして一九七〇年光伝送路としてのガラス光ファイバーの技術が進んで光の伝送損失を少なくする事もできました。

光通信の歴史は古くから種々な方法で試みられによる通信がその主流をしめてきました。一九六〇年レーザが発明されて以来通信の搬送波として応用する事が考えられました。そして一九七〇年光伝送路としてのガラス光ファイバーの技術が進んで光の伝送損失を少なくする事もできました。

光通信の世界的権威者臣表彰も受けられました。

光通信の歴史は古くから種々な方法で試みられましたものの現代は電流による通信がその主流をしめてきました。一九六〇年レーザが発明されて以来通信の搬送波として応用する事が考えられました。そして一九七〇年光伝送路としてのガラス光ファイバーの技術が進んで光の伝送損失を少なくする事もできました。

更に電気信号を光の信号に変換する半導体レーザの室温連続動作が可能になる等光ファイバーによる通信の実用化への技術が進みました。光ファイバーによる通信は搬送波が低損失であること、広帯域であること、線の断面積の小さいこと、従って軽く曲げやすいこと、電磁誘導の影響を受けない等数多くの特性をもつ将来有望な技術であります。末松学長の研究の成果と学長としての手腕が期待されております。

◆　◆　◆

原　昭午　学長誕生

本紙編集中にまたまた吉報が飛び込んできました。

同じく中津高校第二回卒業生の原昭午博士であります。原博士は中津川市新町の御出身で名古屋大学文学部を御卒業になり歴史を専攻されました。昭和六十二年四月高校野球の名門東邦高校の上部校である東邦学園短大の学長に就任され御活躍中であります。郷土に関係ある仕事として岐阜県史の編集に携わっておられ関係者のなかでは御高名であります。

末松学長就任を祝う

（二回生）小堺卓男

末松安晴君が昨年十月東京工業大学の学長に就任された。同窓生の一人として、心からお祝い申上げたい。

末松君は、東工大入学以来、ずうっと居られたので、生え抜きの学長さんということでは、外に例があまりないのではないかと思う。東工大のことは、あまり知らないのだが、そんな気がするのである。

今日では、光通信が当り前のようになっているが、脚光を浴びるようになったのは、ここ数年位前ではないだろうか。その中で、私も末松君が、その研究をしており、日本でも有数の研究者と知った次第で、その関係から、講演に来ていただくよう頼んだり、また、商工会議所が依頼されて来ていただいたりして、話を伺う機会があった。又或る時には、光通信に関する企業を紹介していたりして、お世話になったこともあった。

そうした折に聞いた話する研究をずうっとしてきたのだが、始めのうちは、海のものとも山のものとも、何になるものかも分らずやってきたことのことで、そういった基礎研究をこつこつやってきた末松君の努力が、今日の成果に結びついていると思う。

言葉は悪いが、「恵那雑巾」の面目躍如とも思われる。

今後は、大学運営のトップとして、多忙な日々になることと拝察されるが、高校時代、サッカーで鍛えられた、頑丈な体で、きっとこなしてくれると思うし、次世代の日本の科学水準に寄与するような科学者を育ててくれることを念願している。

21世紀の繁栄と大学

東工大学長　末松　安晴

「一年先を考えるなら畑を耕せ、十年先を考えるなら木を植えよ、百年先を考えるなら人を育てよ」との古語は、世界的な富を手中にして未曾有の繁栄を謳歌しているわが国が、この繁栄を維持し、間もなく迎える来世紀をより住み易い社会にするために何を為すべきかを暗示しております。

来世紀の社会は地球規模で益々人口が増えると共に組織化が進み、科学技術の助けが不可欠と云われます。幸いわが国は、低い人口密度を前提に発達した西欧の精神的風土と異なって、人口密度が高いことを前提にした東洋の精神的風土を基盤にしております。従って、このような精神的風土の中で将来に備えた科学技術を醸成するのは人類の繁栄のために誠に好ましいことと云えましょう。

しかし、一民族の繁栄には必ず寿命があるのは歴史の教訓です。問題は如何にしてこの寿命を引き延ばすかにあり、そこで、最初に引用した諺に帰らざるを得ないのです。長い先を見た研究、そしてこの研究を通して行う教育は大学の役割なのです。こうした優れた大学の研究教育には巨額の投資を必要とします。

東京工業大学を例に取ってみましょう。本校は、東京の目黒区大岡山と横浜の長津田の二カ所に主なキャンパスがあり、理学部、工学部、生命理工学部（平成二年度開設）と、それらの何れにも属さない単独の大学院総合理工学研究科、そして、理工学の基礎を重点的に研究することを任務とする四研究所から成り、三学部、一独立大学院の理工系総合大学です。この地に各種の研究施設、センター、観測所等があります。また、図書館は文部省の理工系コア図書館で主要雑誌を全て網羅し、月々一万千部の雑誌を購入しています。さらに、両キャンパス間には専用の光ファイバ通信システムによる大型のテレビを用いた講義や会議がなされています。

学内には教授・助教授が約五百五十名（各教官はそれぞれ教室からなる独自の研究室を持っています）、助手等が約四百五十名、事務職員が約七百八百名、大学院約二千百名で、外国人留学生は三十五ヶ国から約五百二十名、この他に、客員研究員や研究生が国内から約二百五十名、国外より約二百五十名、その他多数の研究教育補助者がおり、総数は一万人に近くなります。国外研究集会出席者は年間七百五十名に及びます。この様に大学は国際化され、日夜の研鑽によって人類の叡智ともなる科学技術の創造、開拓と整理保存、並びに継承を行っているのです。

二十一世紀を後十年に望み、世界的な繁栄を誇るこの時期にこそ、わが国にふさわしい一層の投資を大学へとお願いして終わりといたします。

関西支部の活動

第四会総会・懇親会

支部長　中川　鮮

昭和五十八年に発足した同窓会関西支部では、総会・懇親会を隔年に開催してきました。時代が移った平成元年度は第四回を迎え、少し趣きの異なった行事を目標として実施されました。回を重ねる毎に呼びかける対象が拡大して、今回は高等女学校から高校の二十回生までと連絡を拡げました。

前回までは、大阪のホテルを会場として開催していましたが、今回は、バスを利用して京都の比叡山延暦寺と大原三千院を訪ね、途中比叡山の山中にある叡山閣にて昼食会をもち、ここで総会を開くという綿密な計画をたてました。実行委員を柴山幸祐（六回生）、大野亘（七回生）、北原美津子（九回生・旧姓吉村）の三氏が務め、行きとどいた配慮で楽しい会となりました。参加者は四十八名でした。

同窓会本部より、伊藤成章会長、吉村光彦副会長、早川章衛先生の参加をいただき、最近の中津高校、中津川市のお話をうかがうことができました。今回の総会・懇親会の模様をご報告します。

当日、京都駅八条口に朝九時三十分までに参加者が集合しました。九時四十五分京都駅を出発したバスは、山科からびわ湖畔の大津市を経由して比叡山へ登り始めました。

昼食会は京都らしい、雰囲気と料理によるもので、実行委員の気配りが感じられるものでした。

総会がもたれ、支部役員の交代と二、三の事務局の報告説明がなされた。

この席で、同窓会長伊藤成章氏より、ご挨拶があり、最近の中津高校の状況報告ならびに同氏に託された杉山校長のメッセージが紹介されました。母校の生徒達は勉学と運動を両立させて充実した学校生活を送っていること、また、イギリス人講師を迎え、英語教育に力点をおいている等々にふれられていました。

故郷を離れて、生活している者には、この様な校長先生からのメッセージには参加者一同感激した思いでした。今後増々母校がその目標に沿った発展を続けることを念ずるものです。

和やかに昼食会を過し、話に花が咲き、比叡山を下って大原の三千院へ向かいました。

あじさいが咲くには少し早い三千院でも、皆さんよく歩きました。

帰路は高野川に沿って八瀬を下だり京都の街へ出て、朝の出発点である京都駅八条口へ無事戻ってきました。時間の許す有志の者で、東山連峰を望むビルの屋上に陣を張り直し、手に持つのも重い大きなジョッキを傾むけつつ、何時までも散ることのない話の花が咲き続けていました。

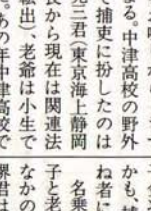
関西支部では今後も中津高校、同窓会本部、関東支部などと連絡をとりつつ、会員の結集できる楽しい集いを開催していきたいと考えています。また、支部活動の内容も知恵を出し合い、話し合い、意義あるものにしたいです。

高等女学校卒の参加者

根本中堂にて

随想

息子という芝居



週刊新潮
編集長
（二回生）
山田　彦彌

三年ほど前、東京・日本橋の三越劇場で、宇野重吉の最後の舞台を見た。武者小路実篤作「馬鹿一の夢」だった。台詞に力がなく、動きも甚だ緩慢で、いまにも事切れるのではないかとハラハラしたが、役者の執念などというには余りに爽やかな、いや、宇野自身、すでに小ざっぱりした美しい幻影でさえあった。

もっとも、この日三越劇場に出かけたのは宇野の芝居を見るためではなかった。劇団民芸は、他に有島武郎作「御柱」も上演したが、目的とはもう一つの出し物、小山内薫作「息子」だった。昭和二十四年、中津高校文化祭で、われわれもまたこの「息子」を演じていたからである。

三十七、八年の歳月が若気の恥かしさも蘇らせたが、ひたすら懐古一点張りに思いつめて開幕を待った。登場人物は、火の番の老爺、金次郎、手先と呼ばれる捕吏の三人だけ。配役を順に並べれば、滝沢修、梅野泰靖、安田正利となる。

雪の降る舞台左手に火の番小屋、師走の深夜ふと立ち寄った捕吏と老爺の乱暴なお喋りからドラマは始まる。中津高校の野外舞台で捕吏に扮したのは丸山晃三君（東京海上静岡支店長から現在は関連法人に転出）、老爺は小生であった。あの年中津高校では二度も火事に見舞われ、講堂らしきものは消失していた。幸か不幸かわれわれの火の番小屋はその焼跡の木材から生れたが、民芸に劣らぬ立派な出来ばえだった。恵那中学時代お世話になった化学の大山正先生が作って下さったのだ。

老爺に憎まれ口をたたかれながら捕吏が去ると、小屋には頬かむりをした怪しげな若者が現われる。小堺卓男君（中津川市役所民生部長）が引き受けたこの得体の知れない二枚目こそ、実は九年前上方に行き、修業の末いまでは立派な商人になっていると老爺が信じてやまない息子金次郎その人だった。しかも、捕吏に狙われるお尋ね者に落ちぶれていた。

名乗りを上げられない息子と老爺のやりとりはなかなかの味わいなのだが、小堺君はうまかった。再び登場する捕吏との間で、追いつ追われつの立ち回りになるが、丸山君も素晴しかった。

事実、梅野の金次郎、安田の捕吏に、小堺、丸山の両君がしばしば重なって、柄にもなく目頭が熱くなった。むろん、小生が滝沢の老爺に重なることはついに一度もなかった。

「息子」に誘われて、宇野最後の舞台にたまたま立ち寄ったのも不思議な気がしてならない。

御挨拶

同窓会長　伊藤　成章

全国の同窓生の皆様、第三号の同窓会便りを発行するにあたり一言ご挨拶申し上げます。

日頃は同窓会の諸行事にご協力下さいまして、誠にありがとうございます。昭和六十一年五月に八十周年の式典を終えましたので、今年は八十四年にもなり、高等学校卒業の第一回生も還暦も間近となってしまいました。月日の経つのが早いなあと実感する此頃です。

さて、昨年は正に激動の年でありました。天皇の崩御に始まって、参議院の保革逆転、ソ連ではゴルバチョフのペレストロイカ、米ソ両巨頭のマルタ会談での「冷戦」の終結宣言、ベルリンの壁の崩壊そして東欧諸国の共産主義の崩壊と目まぐるしい動きでした。

国内は好景気で物と金があふれ、正月の福袋に一九九〇万円のものが出て売れるなど、ジャパンマネーが日本はおろか世界を駆け巡っていますが、その一方では「心の豊かさ」が問われるようになってきました。今年は何か気持ちの充実した年にしたいと思います。

母校では、慶事としては高校二回生の末松安晴さんが昨年十月に東京工業大学の学長に就任されたことです。学長の職務はなかなか大変だと思いますので、末松さんのご健勝と今後のご活躍を祈念致します。第二第三の末松さんが続いてくれることを期待したい所です。

又不幸なことは、音楽部の部室が全焼し同時に多数の楽器、楽譜も焼失したことです。後程詳細な報告があると思いますが、同窓会としては本部役員会の承認を得て、見舞金として壱百万円を贈りましたのでこの紙面を借りて皆様方にご報告致します。もとよりこれで十分ではございません。

皆様方のご厚志をお願いしたい気持ちです。

学校の方では進学の成績も年々向上しておりますので、今年もかなりの成果をあげてくれるものと信じています。

最後に同窓生の皆様方のご健勝と幸多からんことを祈ってご挨拶と致します。

黎明の鐘 ―校歌に思う

学校長　杉山　仁

今、学校の始業のチャイムは、校歌の第一節「高鳴るや黎明の鐘」のメロディで始まる。知らず知らずのうちに中津高校の一員として、先生方も生徒諸君も、今日の一日を頑張ろうという気にさせる、さわやかで、明るいメロディである。一日の学校のスタートに誠に適したものだと思う。

ところで、校歌の歌詩そのものは、伊藤嘉夫先生の博学多才な学識から生まれたものであるだけに、ざっと聴いただけでは中々理解出来ない。

ちりばめられ、選びぬかれた一言一句を、しっかりとかみしめるように歌うことにより、始めてこの歌の格調の高さが、心を打つのである。

二節目の「自由と個人の尊厳」の精神は、この校歌の基調であり、永久に守られてゆかねばならないものと思う。世界の歴史の中で、人々が真の自由を獲得するために、どれ程苦難の道を歩んだことであろう。僅か数文字であるがここにはかり知れない深い意味がある。

ただ、「自由」と「放縦」とは全く異なるものであると私は思う。従って、中津高校の教育は、決して楽なものでなく、全ての面で厳しさをもっている。人間としての個人を尊重しつつ、同時に豊かな人間性を養うために、学習や生活規律をしっかり身につけつけさせようとしているのである。

同窓生の先輩の皆さんが、連綿と、八十三年間中津高校をバックアップしてきて下さったのも、校歌の一語一語が、胸の中に残っていて、いつも愛着を感じておられるからだと思う。

今日も、校舎南窓から「天雲に恵那山」の聳つのを見て、大きく深呼吸する私である。

思い出すままに

乾　涼月（英之助）

恵那山の秀麗のある限り中津高校を忘れることはあるまい。

戦争の苛烈の中に恵那山をまともの運動場で広寒ながら早朝の薙刀訓練をした。戦争に負けて間翁の像の前で敗戦の詔を聞いた時全員が泣いた。動員の三菱工場から駆けつけ、全員が手に神風の手拭を手にしながら。その後も授業というより遺家族奉仕で、遠く信州までも出掛けた。

しかし立直りは早く戦後三年目で京阪への修学旅行に専攻科生をつれて出掛けた。その後何の縁か国語教師の私が体育部長で二度の運動会をした。民主化の早かった私は、参観の父兄と一緒に「木曽踊り」しようと提案したところ、それまではとしりぞけられた。

高校となって二年間教員組合の委員長だった。闘争もあり、各地に出掛けたが、それよりもインフレに対処する給与闘争であり、煩わしい給与計算だった。

中津高校に二度の火事があり、二度目の時はすさが剛毅の手島校長も失神状態だった。川上書記の依頼で終始付き添った。その手島校長、後に岐阜栄転、定年後富田高に就職されたが、全く弱気になられ、歩行も困難だった。中津時代叱り放しの先生、碁に負けたからと一時間もかけて私の家に遠征に来られた。

中津高校の校歌は、後に跡見女子学園学長にもなった親友の伊藤嘉夫の作詞だが、何年か前の第八十周年記念に招かれ、女生徒バンドで校歌演奏を聞いたが、何とも言えぬ感激だった。恵那山ある限り中津高ありの力強さだった。

私の中津川在住は十二年間、縁は切れたかに見えるが卒業生会は二十年来続き、最後には校歌をうたって終る。

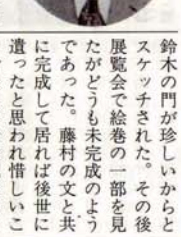
幸いに私も昭和三十年加茂高に転じ、ここで定年を迎え、引きつづき岐阜の鶯谷女子高校に定年の七十歳まで勤めた。国語教師の私は日本史専任で、併せて図書館部長でもあった。

その昭和四十八年秋に岐阜県芸術文化選奨の栄を受け、今は短歌と原稿生活の毎日である。米寿と第三歌集「気多の村」の祝賀会も催された。

恩師の寄稿

前田青邨

井口　尚輔



前田青邨と初対面したのは私の鎌倉師範在勤中の頃。遠縁にあたるので一度御挨拶に行くようにとの父の進めで北鎌倉のお邸へお伺いした。

円覚寺続きの高台で美しい芝生の庭があり、大和絵風に御自分で設計された由であった。先生は一見小柄で和服の上からカルサンを穿いてみえ、当時六十才位。その後数回お邪魔し夕食を戴いたこともあった。

横浜の観艦式で島崎藤村と一緒になり青邨が絵を藤村が文を書いて木曽路絵巻を作る約束をしたとのこと。戦時中中津に疎開され、落合の私の家の荒れた上り框をほめ小鈴木の門が珍しいからとスケッチされた。その後展覧会で絵巻の一部を見たがどうも未完成のようであった。藤村の文と共に完成して居れば後世に遺ったと思われ惜しいことである。青邨記念館に本陣と八半の両人を描いた郷里の先覚の下絵があるのも夜明け前との仲は偶然ではない。

中津高小で父の半年前の当時から武者絵は一寸上手であったが、上京し歴史画家梶田半古に就いて洞窟の頼朝で名を挙げた。兵の弟さんが横浜辺に居り体格がよいので重い甲冑を着せられたが礼は貰えなかった。歴史画の材料やらムード作りのため骨董が好きで沢山蒐集されていた。中世の腹巻や蒔絵の香爐など重美級を持ってみえたが、小箪笥の引出の中に伝正倉院の玉の物差。興福寺十大弟子の残片・中尊寺の螺鈿などがあって驚かされた。兄弟子の小林古径と仲がよく、書生時代京都を訪れ素晴らしい仏像を見付けたが、二人合せて十三円に覚束なく無念の涙をのんだものが後にわかもとの重美となっている…。美術史の良い本を聞くとそんなものがあるなら絵の必要はないという返事であった。当時北鎌倉の山崎に開かれた北大路魯山人の星岡窯を訪ねた話をすると、篆刻はたしかにうまいので自分も使っているが他は大したことはない…。後の文集『作画三昧』を見ると、古径と一緒に大英博物館の女史箴図を摸写した時薄暗く寒かった、エジプトのカルナック神殿はどこにもない壮大さであったなど書かれている。私の体験からしてもエジプトは偉大である。

なお同書中の木曽路はヘツで育った少年時代の郷里の懐古があってほほえましい。

奥様は先生より体格がよく荻江節の人間国宝、この奥様が足らない絵具を買いに時々京都まで行くというお話、未娘さんが京都旅行で千体仏を見付けて来たと先生がさも満足そうに話されたこと、その京都に四十年近くは住み展覧会には出来るだけ出掛け、中でも青邨の絵の沈潜する華やぎをなつかしく見つめて帰る私であるが、戦後園田民夫先生の友人成木清一さんが青邨のものを扱って居られ、竹取物語の一節か空から舞う花吹雪に群衆が歓喜する光景を、園田・成木のお二人の想い出とともに忘れ難く思うのである。

山上断想

勝野忠夫

早いものだ。気がついてみたらこの三月が来ると現役をしりぞいて四年になる。引き続いて二箇所へ非常勤の講師として出かけているので、生活のパターンが変らないせいか定年後の心境などといったものとは全く無縁だ。以前と同じような毎日が流れていくだけである。健康でいられることを何よりと思っている。この年になれば、そろそろ生涯の結末やら老いをいかに生きるかなど考えねばならぬのだろうが、まだまだそんな気にはなれそうにない。変に老成ぶって生悟りめいたことを考えるよりは、まだまだこだわってみたいものがいろいろある。

大正十四年生まれなので、昭和の年号がぼくの年齢と重なり合う。従って文字通り昭和史とともに生きて来たわけだ。その昭和も昨年で終止符が打たれた。六十四年の昭和の歴史は、日本にとっては勿論ぼく個人にとってもまことに波瀾に富んだものだった。そのあたりのところを何とか整理し、まとめてみたい思いがしきりにする。

八十年代最後の年であった昨年は、思えばなかなかおもしろい年であった。おもしろいといってできるのだ。

生きていくために人間は、時には現実に流されたり妥協したり屈伏したりもする。だがその志が人間の気高さに向かって息づいている限り、時あれば怒涛のごとく噴出し、歴史の歯車を正しい軌道に乗せていくことが

は何か高見の見物みたいだが、ダイナミックな歴史のうねりを、ひしひしと肌に感じさせてくれるような年だった。「平和」と「自由」がいかに大切なものかを改めて思い知らされた年でもあった。天安門事件、マルタ会談、ベルリンの壁崩壊に象徴される東欧の動き等々。

一連の世界の動きは、日本の姿をくっきりあぶり出してくれた。「羨望なき賞賛」をされる経済大国日本。恥知らずな利権屋どもの横行。子供や若者にまで見られる拝金主義。マスコミの衆愚主義。鼻持ちならぬ中流意識。集団主義等々。歴史、伝統、文化、民度のレベル、質の違いをまざまざと見せつけられた思いだ。

いよいよ二十世紀最後のステップである九十年代が訪れて来た。国際社会の中で日本が「羨望」をもって「賞賛」される国になるのはいつのことであろうか。

今ぼくは小高い山の上の寓居に住んでいる。争われないものでこの一文高見の見物然たる文章になってしまった。あと何年生きられるかわからないが、できるだけ長生きをして、相対化の視点で世の移り行き、人の姿を見据えていきたいと思っている。中津高校の一層の発展を祈ってやまない。

卒業生文庫

雪にけぶるような二・三日が続きましたが、相前後して二冊の本が届きました。女学校三十六回生、太田光子著『光陰』と十四回生、大島史洋著『いらかの世界』です。

「光陰」は結婚と同時に句作を始められて四十年間の年月を感じさせる句集です。木曽谷の吟行を中心とした句が多く、自然の懐に同化してゆったりと読まれています。

●狐啼く真夜一身を耳とせり

●鷹一羽翔たせ一羽をとどめし樹

●籠り堂凍る三和土に一穢なし

「いらかの世界」は著者の第五歌集になります。一つ一つの言葉に深いこだわりと重さを感じさせる歌集でした。連作も多く新しい歌境が拓かれています。

●『だちかん』とわれを叱ればふるふると神経の束四肢にみなぎる

●わがうちの泉にポプラはそびえいき人を評して倦まざりしころ

今後共、益々発展充実させたいと思っております。卒業生文庫への連絡、御寄贈をお願いします。

卒業生文庫は、先回紹介しましてから、左記のように十五冊増えて七十一冊となりました。

著者	書名	出版社	備考
泰　恵美子	いま、日本の子どもたちは	中央法規	4回生
〃	子どもの問題百問百答	〃	〃
亀井　俊介	わが古典アメリカ文学　亀井俊介の仕事2	南雲堂	2回生
〃	本めくり東西遊記　亀井俊介の仕事5	〃	〃
近藤　愛子	四季のしぼり染め	大月書店	高女34回生
大島　史洋	わが心の帆	大和書店	14回生
〃	時の雫	ながらみ出版	〃
〃　共著	モンキートレインに乗って	短歌新聞社	〃
〃　〃	援歌'87	ながらみ出版	〃
〃	定型の視野	雁書房	〃
早川謙之輔	木工	杣工房	7回生
安江　茂	幻郷　安江茂歌集	本阿弥書房	〃
末松　安晴	光デバイス	コロナ社	2回生
太田　光子	光陰	牧羊社	高女36回生
大島　史洋	いらかの世界	六法出版	14回生

朋友通信

雑感

大塚　節（高女二十九回）

しみじみ想う生命について！　夏の名残りの草木をたたいて降る秋の長雨を愁霖。そんなイメージにふさわしくない荒々しい大雨は予期しない災害を残しました辺の山々は紅葉へと色づき始め肌寒い朝夕を迎え秋祭りの笛、太鼓、子供みこしの声、快晴に恵まれた長閑な農村風景です。が突然やって来る病魔。私は四十代で脳血栓を、やっと落ち着いた頃又六十代の始めに「くまもっか出血」と生命の保障も無い程の大病をし意識もなく機能もずたずたになった日々を過ごしていました。現在では日常生活は勿論、思いつけば旅にも出かけられる程に回復しました。右半身不髄の身を横たえ意識が戻った時の悲しみ、あわれさはたとえ様もない程のみじめさでした。異様な程不気味な頭痛が脳天を丸く走り前の時とは痛みも場所も違っている今度は死ぬかも知れぬと思いました。中津川市民病院へ運ばれた事も手術をした事も誰に付きそわれているかも記憶にはありません。一ヶ月余り過ぎた日「私は生きている助かったんだ、うれしい」私は守られている助けてもらえたと思うと感謝の気持ちが込み上げボロボロと涙が流れて泣きました。ベットにいる人は丸坊主の人、手足はしばりつけられ鼻や胸からは管が入れられ知らない家政婦さんの世話になっていました。リハビリもし機能回復には言いつくせない努力をして今日を迎えています。生命は助かり並の人以上に旅にも講座にも参加し命ある限りと頑張っています。

「風立ちぬ、いざ生きめやも」

（ホール・ヴァレリー）

物に栄枯あり人に生死あり昔の女人達は此の世の無常を悟った時物語は嵯峨野を舞台にして具現化した「もののあわれ」を見たであろう事は歴史文学の中に数多く伺い知る事が出来ます平家物語の祇王、祇女、仏、小督、そして横笛と悲恋のヒロイン達は何れも十代で出家隠棲しやがては此の地に往生の本懐を遂げています。時の流れこそ違っているけれどいかにも「あわれ」な物語と思います。秋になると嵯峨野を訪れたくなります。全快してから六年目の秋を迎えています今年は主な旅として四国八十八ヶ所巡拝、箱根から昇仙峡へ、信濃の鹿教湯温泉へ、九州長崎、雲仙へ温泉へと旅しました。又若い人の仲へ入って「ヨガ」の講座へも通いました。主治医の先生はアメリカへ留学され二ヶ年で帰国されましたが一昨年十一月名古屋大学の方へお帰りになりました。お別れの時「くもまっかの再発は先づないだろう充分に治療してあるから、やりたい事、行きたい所があれば迷わず実行してみよ」と言われ私は安心して旅にも出かけ講座もいろいろやりました。機能回復の為指先の運動、ボケない様に脳の運動、ストレス解消、精神統一と。現在続けてやっているものは大正琴、習字、御詠歌、謡曲、俳句、七宝焼、一ヶ月のうち十日位家にいる位です全てリハビリとしてやり始めた事が今では余す人生の生きがい学習となり楽しんで頑張っています。「いつ死ぬかいつ死ぬか」と不安な日々でしたが後遺症もなく九死に一生を得一％の確率から百％の人生を授けられ竿をなくした小舟が容易に越されないであろう逆境を支えてくれた生命力は何であったか？　と考えさせられます。気のつかない所で人に愛され生かされている人生。

人との出合いによって細胞の新陳代謝を促し自然の中にとけ込んで余す人生を悔なく美しく老いたいと願っています。

「人生にリハーサルはないのですから」

●花遍路被らぬ笠を背に負いて

●帰る雁吾にも欲しき双翼

●仏壇に供小手製の栗粉餅

●七草粥食へてぬくもり遠雪崩

●弾初めは「恋の季節」を繰返す

思いがけない係わり

大澤典子（五回生）

海抜ゼロメートル地帯といわれる愛知県海部郡へ、私が名古屋から疎開をしたのは、終戦一年前の夏でした。この地区は、伊勢湾から侵入するB29や艦載機の名古屋方面へ空襲に行く通り途でしたので、田舎だからとのんびりしていると、艦載機が直接襲撃を仕掛けて来て逃げ惑ったり、焼夷弾を藁葺屋根へ軒並み投下して焼失されたりの修羅場と化すこと屢々でした。そんな中で父の仕事の関係もあって翌年夏、恵那郡坂下町へ再び疎開を仕直しましたら次の日が終戦だったのです。

一日違いで、随分山奥へ入り込んだ気がして悔やみましたが、山と水のきれいな町が居心地良くなり、二年間住みついた後、中津川へ引越して、四半世紀を過すことになりました。

現在、東京の片隅に住んで、あっという間に、それに匹敵する年月を迎えようとしております。

思い出深い中津川のことを新聞雑誌で見付ける毎に、夢中でその記事を読み、中津川に係わることや、ご出身の方と聞いただけで、身を乗り出してしまうのが、私の偽らざる現状です。

早や七年程経ってしまいましたが、大学生の長女が、卒論作成のための英文タイプライターを打つ音が、底冷えのする夜毎、にぶい音を響かせていました。家族は耳を慣らされてしまっていたのですが、時には頭痛や、不眠症の種になりました。音が絶えますと、今度は論文が捗らないのでは、と心痛の種となりました。タイプライターの音のしない夜は、ほっとして、そのひとときに私は居間で読書をして居ました。長女が二階から下りて来ましたので、お茶を入れてやるために、読みかけの文庫本を座卓の上に置いて席をはずしましたら、ママ、どうして亀井俊介先生の本を読んでいるの、と驚いたように尋ねました。あなたこそ、何で亀井先生を知っているのよ、と私は問い質しました。すると長女は、私は現在、アメリカ文化研究コースに属していて、うちの大学にも亀井先生はいらしたみたいで、ゼミの先生がよく著書をテキストに使ったりしていらっしゃるの。だから亀井先生の本を読んでいるうちに傾倒して、今は最も尊敬している方の一人なの、と言いました。

私は、中津高校の先輩である亀井先生は、長姉と同級生であられたし、母が先生のお母様を存知あげているなどと、得意になって長女に聞かせました。

へえ、陽子伯母さんは同級生だったの。それにママはその妹です、と言って先生に私を紹介して、お願い。私は卒論を書くに当って、とっても悩んでいるの。

新人類とも厚顔とも思われる長女に急かされて、中津高校同窓会名簿より、先生のお宅の電話番号を見付けて、重いダイヤルを回しました。受話器の向こうの先生は、とてもおやさしくて、事の成り行きをすぐ解って、直接長女とお話をして下さいました。彼女の感激は言わずもがなです。

何だか前途が見えて来た感じよ、ママ有難う。

階段を上って行く長女の弾んだ足音を聞きながら、私は「サーカスが来た！」の、読みかけていた頁を開きました。

英国人のつきあい

菅井　直介（第六回生）

中津高校を卒業してから働いた場所で印象に残っているところの一つに人口と面積が日本のほぼ半分の英国があります。

引き受け手のなかった三井厚生病院（現三井記念病院）の麻酔科の創設に参画し軌道に乗った頃、以前米国にいた時二度訪ねていた英国でもう一度研究をやってみようと思い神田にあったプリティッシュ・カウンシルを訪ねました。代表が私の話を聞いて下さり、ウエルカム財団に研究計画を出すようにとのことでした。これが通って渡英することになりました。この代表はその後すぐ定年でおやめになり、渡英直前に自宅へ招いて下さったのは後任の方で、二年後に帰国した時には又その後任の方のお宅に招かれました。

ロンドンの王立外科医会の麻酔研究部はベイン先生を中心として、英連邦を初め世界中の人々が集っています。住んだところはロンドン北部の緑にかこまれた住宅街の近くにある研究所のアパートで十一の外国人の家族が住めるようになっていて、前には子供を遊ばせることのできる広い芝生もあります。給料は英国人の同程度の人と同じで日英の租税協定で私どもは税金を払わなくてよいので、はるかに高い給料でした。従って二年間に国内はもとより大陸にも四回旅行することができました。この間に英国では炭坑ストライキがあり、当時のヒース首相がBBCテレビで節電などを訴えましたが、次の日の同じ時刻で同じ長さの時間に反対党の影の首相が全く反対の演説をしていました。又、アン王女の結婚式の前の日にはやはりBBCで一時間の対談が組まれ、かなり厳しい質問にアン王女も鋭く答えていました。後にアン王女はロンドン大学の学長に就任しましたが、これにも選挙が行なわれ日本に帰っていた私にも卒業生の評議員ということで用紙が送られてきました。ベイン先生から私の研究でロンドン大学の学位をとったらといわれ、実験を続けながら論文を書いて二年目の終りには口答試問を受けました。試験官の一人はギリシャ系れのザイミスという有名な女性の薬理学者で、試験はかなり厳しいものでしたが終ったと同時に合格といわれました。

英国の対外文化製作はプリティッシュ・カウンシルを通して行われていますが、日本と較べて巨額を使い、しかもこれを最も有効に使おうとしていることがわかります。長い国際的視野から、留学生に対する投資が最もよい防衛費の使い方の一つであるということをはっきりさせています。この数年間私どもの周囲にも多くの外国の方々が、勉強に来られていますが、これらの方々と接する時に、いつも英国や、その前にいた米国でのさまざまな思い出を大切にしたいと思っています。尚、毎年末には元留学生を中心にしてプリティッシュ・カウンシル友の会が開かれ、英国大使夫妻も来られます。

パリにて

水上　貴博（十一回生）

十年になる。八十年代まるごとフランスで生きているわけだが思い返してみると必死の道程だった。一九八〇年、画家であるための勉強にパリ留学を計画し実行した。当時自分にとってパリ留学は画家の神的存在になって帰ってくることだと思っていた。パリは芸術の都だと言われていたから美望を禁じ得なかったから五年六年となると神そのものだと思っていた。自分には三、四年頑張れば生きて動めく強烈な人間の社会だった。目にする芸術作品は人間の営みと一体化していた。留学という受身な形から能動的な芸術活動こそ自分の人生目的だと決心できたのはパリの持つ空気のせいかも知れない。言葉の不自由さに加えてひんぱんな義務書類申告には辟易としパリに存在できる条件は気力の有無だった。幾度か挫折寸前におちち入った。生活が精いっぱいで製作ははかどらなかった。それでも続け努力し忍耐をくり返す。五年目にして芸術家としての滞在許可を手にした。その頃、資金も尽き果て日本からの送金も止る。だがまたその頃から作品も売れるようになり自立可能となり始める。この十年間で千点たらずだがそれでも確実に仏国内に散在するの作品群を思ってみると神的存在にあこがれたあの時代の自分を乗り越え呼吸するように創造活動に専念している自分を見ることができる。二十世紀の終わりに世界の激変を肌に感じ、そして自分の年令の積み重ねを意識しながらゼロから築き上げた一つの方向性をより確かな流れにしてゆけるよう念じている。ソ連領空の機中にて（一九八九年一月十二日）

パリ風景　伊藤　成章氏所蔵

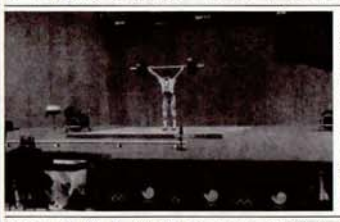
オリンピックに参加して

小栗和成（三十四回生）

一九八八年ソウルで開催されたオリンピックに、ウエイトリフティング六十kg級の代表として参加することができました。オリンピックに出場することは、実力だけでなく、運も必要だと思いました。四年に一回しか開かれない為に三年連続チャンピオンの選手でも、オリンピックの年に怪我をして出場できない人もいるから、自分は運がある選手だなあと思いました。

ソウルの選手村に入って、世界のトップの選手が集まっているんだと思い、感激をしました。その時、自分もその中の一人だと言うことを自覚しました。

試合は九月二十日におこなわれ、結果は七位入賞することができましたが、自分のベスト記録より十kg下回ったため、そのことが非常に残念でした。オリンピックという大舞台で自分の力が発揮できず、舞台にのまれ、緊張したことで、試合が終わったあとの充実感がありませんでした。この経験をバネにして、次の目標のバルセロナオリンピック目指して頑張って行きたいと思います。



大舞台に立てたことが自分の人生の最高の経験だと思いました。オリンピックに出場することは、実力だけでなく、運も必要だと思いました。四年に一回しか開かれない為に三年連続チャンピオンの選手でも、オリンピックの年に怪我をして出場できない人もいるから、自分は運がある選手だなあと思いました。

ソウルの選手村に入って、世界のトップの選手が集まっているんだと思い、感激をしました。その時、自分もその中の一人だと言うことを自覚しました。

試合は九月二十日におこなわれ、結果は七位入賞することができましたが、自分のベスト記録より十kg下回ったため、そのことが非常に残念でした。オリンピックという大舞台で自分の力が発揮できず、舞台にのまれ、緊張したことで、試合が終わったあとの充実感がありませんでした。この経験をバネにして、次の目標のバルセロナオリンピック目指して頑張って行きたいと思います。

学年会だより

高女実科十回

此の度中津高等学校同窓会誌発行の御通知を頂きましたが卒業以来六十五年も過ぎてしまひました。時代と共に社会も学校も色々変わりまして老人には解しかねる事も多く、なかなか追つく事が出来ません。小人数のクラス会も何回も致しましたが、記録もなく申しわけ御在いません。昨年から出席の出来ない人が多くなりました四十二人のクラスの内、生存者は十四・五名となりました無為に生きて居るのが申しわけない様な気がいたします。なつかしい昔を思い出して、五首ばかり作ってみました御笑覧下さい。

●度々の彩火に失せし古き母校わがまなうらに青春夢
●大木の桜並木の花吹雪運動場はテニスとフットボール
●旭ヶ丘の花の影中津川辺の月の下校歌なつかし運なる夢
●海老茶袴に朴歯下駄鼻緒は白皮、石の坂道
●チョビ髭のお国訛りの体操教師アァー体操も楽しかりし

岩田廣枝

高女二十二回

戦後昭和二十一年旧満州国新京市より引揚げ、恵那の山里に住み、昭和二十三年五月頃と記憶していますが、中津高等女学校の同窓会に出席致し、昔のままの校舎、広い校庭、恵那山の雄姿等おなつかしい先生方、お友達にお目にかかった事等昨日の様に思い出されます。それから学校統合という新しい時代に入りました。昭和四十三年より民生委員として地域での奉仕の仕事のお手傳をいたしました。昨年は知事表彰を頂き、感無量でした。在宅福祉問題では、一人暮し老人のお世話、母子父子家庭問題、障害者問題等御手傳をいたしました。こうした仕事が出来たのも健康に恵まれたからと感謝しています。平成の時代に入って生活の豊かさを求めた時代から心の豊かさを求める時代へと変って行く事と思います。皆様御体を大切にして、おすこやかに御暮し下さい。

可知房江（旧姓伊藤）

高女二十六回

心待ちにしていたクラス会の通知を受け早速開封すると平成元年十一月十二日だった。当番は落合在住の友、渡辺貞子さん塚田よしのさん加藤美登志さんのお世話になりました。場所は木曽の連峰をバックにした水豊かな木曽川の畔その名も「升畔」静かな料亭でした。思えば昭和五年四月憧れの中津高女に入学以来両親の愛情にはぐくまれ四年間の学生生活を共にした女学生も今では七十の坂を越したお婆ちゃん達、部屋に集った瞬間お下げ髪の年令に省り賑々しく昨年につづいて再会を喜び合いました。

卒業以後始めて会った友に「あんた誰やったの？」と聞く一面もあり、「憧れの中津高女に入学以来四年間の学生生活を共にした女学生も今では七十の坂を越したお婆ちゃん達、部屋に集った瞬間お下げ髪の年令に省り賑々しく昨年につづいて再会を喜び合いました。

卒業以後始めて会った友に「あんた誰やったの？」と聞く一面もあり、思い乍ら…

最後に校歌を合唱しそのメロディーは木曽の川面に吸いこまれる如く来年は下呂温泉で一泊のクラス会を約し健康と幸せを祈り乍ら解散いたしました。

荻野雪枝

高女二十九回

日　時　平成元年八月七日(月)
場　所　中津川市星ヶ見山荘
集合時間　中津川駅へ十時集合
山荘　三時三十分解散
出席者　十三名
中津川市、恵那市を中心にしての会でした山荘から送迎の車にて往復し帰りには出席者全員にてコーヒーを飲み東、西の列車に乗り解散しました。

東方面からは木曽福島から西方面からは春日井市から出席されました。

会の内容としては木曽川から吹き来る涼風の部屋で用意されたテーブに合わせて校歌「恵那山空に…乙女子われら」五十年前の乙女時代にかえり校歌の合唱、近況話し合い、ふくびき、あみだくじ、じゃんけん遊び等解散の時間になり駅まで送ってもらう山荘で記念写真を撮り又の再会を約束して。

幹事　大塚節　小島氏名
熊崎美代子　永田
瀬木ツナ　本田
古山美奈子　古山
大塚節

高女三十三回

秋も深まった一九八九年十一月一日・二日。恵那山トンネルをぬけた阿智村にある昼神温泉郷の鶴巻荘でクラス会を開きました。

こん度は、中津川のもので世話をしたので、ふる里の美しい紅葉を楽しんでもらい、一晩いい湯につかって、ゆっくり話し合ってもらいたいとの思いで、この時期と場所を選びました。出席者は四十九名でした。

会の様子はとても限られた字数の中では表しきれませんのでやめます。

私たちのクラス会は、初めのうちは三年ごとくらいに開かれていましたが、先も短くなることだし毎年にしたらと云うことにしました。それが、もう、六・七回続いています。

今度は、名簿も全員の協力で整理しました。住所がはっきりしない方が四名、本当に悲しいことですが、物故者が二十名あることが解りました。

次回、一九九〇年は、東京の方が世話をして下さることになりました。

「わあ、はとバスで市内巡りしたいね」と修学旅行気分、(私たちの時代は戦時中でしたから)

今から健康に気をつけて、さそいあって出席しようと誓いあって馬籠宿で別れました。

白井みつる

高女四十回

名古屋キャッスルでの同級会

次回は是非名古屋で開催して下さいと依頼があってから重荷と不安が過り心配致しておりましたが、皆様の協力で盛会に終ることが出来ましたこと厚く御礼申し上げます。卒業以来四十年振りの歴史的出会を感激して歓談する人、東京、大坂方面から日帰りで参加された人、五十三名と青山先生を交えフランス料理にワインを傾け、積る話で時を忘れるほどでした。

互に近況を語り合い、友情を深め、友情の不変を実感出来ました。何よりも青山先生がお元気で潑剌とされ、記憶の確かさと英知に満ちた雄弁さは少しの衰えも見えないのに感服致しました。人生の師表として頑張らなくてはと励みになりました。

間も無く二十一世紀を迎える時、若々しく、生きる喜こびが湧くような、希望あふれる社会や環境作りに微力ながら加わって行き、少しは役に立つ人間であり、少しは勉強に励み文化的な生活を営めたらと理想を抱いております。

次回の同級会どこで開かれるのか、もう次を待ち侘びる思いです。病気で出席出来なかった方の回復を祈りつつ、一人でも多くの方々が元気でお眼にかかれることを願っております。

幹事　太田、吉田
竹中万子

平成元年2月28日　中津高女40回卒業生同級会　於 ホテルキャッスルプラザ

併設中第一回

岐阜提灯ゆれる
長良川畔にて

今回初めて一晩泊りの同窓会を計画し、折しも、中部未来博88も開催中であり、岐阜グランドホテルを会場とし四十七名の盛会となりました。金華山頂に、ゆうゆうと七〇〇年の歴史をしのばせる岐阜城と、遠く連なる伊吹、養老の山なみ、やがて夕闇せまるころ、風折鳥帽子に腰蓑姿の古風な装束の鵜匠、巧みに手綱を操り鵜と一体になって漁をする。かがり火が川面を照らす鵜飼絵巻は、まさに夢幻の境地に誘われます。

会場では乾杯で宴がはじまり、詞吟朗詠、福引やカラオケを楽しみ、可愛い孫の成長を喜び、適齢期の子供の結婚の依頼等々、話はつきる事がありません。翌日は、未来博見学、山東龍館の恐龍次は、宇宙館と足早に昨夜の寝不足も忘れて、楽市楽座でおみやげを買い込み、次回鎌倉での会をたのしみにして帰路につきました。

和田正枝

高一回

「次回が待ちきれない」

「少年老い易く…」学窓を出でて早や四十年、節目の還暦も目前です。一昨年地元在住者が主催した学年同窓会は、八月十三日午前母校訪問午後苗木城跡からの眺望散策、そして夜は「おいでん祭」見物と盛沢山の前夜祭を楽しみ、翌十四日正午恩師松原鉄之、松原弘両先生を囲んで高一回生の同窓会を開催し六十有余名が昔話に花を咲かせました。隔年毎に行っている同窓会は、本年が開催年で担当の名古屋在住者から六月開催と予告があり又楽しみが一ツ増えました。

歳と共に人恋しさは、つのるばかり「一年おきでは長過ぎる」「待ちきれない毎年やろう」等の声も挙がっており、そろそろ開催年の見直しを提案し、より絆を固くしたいと思います。

森下　貢

高八回

三年毎に昭和三十二年卒業生DEF三クラスの合同同窓会が行われている。

平成元年は丁度中津川市の夏祭り花火大会の当日であった。場所も夜烏の「長多喜」で目の前に見事な花火を見ながら涼風に吹かれて飲むビールは最高であった。毎回ほぼ五十人位出席する。飲んでの話題は住んでいる所、家族、趣味、仕事等あるが高校時代の昔話をするのが懐しく楽しい、当時の先生の話となると先生方には誠に申し訳ないが名字が出て来ないもっぱら仇名で憶えている、ゾウキン、チャラカメ、ゴリサ、カワラ、チョウヒチ等々の名で話し合うと話も調子良くはずむ。当時受持ちの先生方も必ずご出席される。そして先生方の若々しい風貌がいつも我々の羨望の的となる。又話の内容も若々しく、北極へオーロラを見に行ったとか、囲碁大会で優勝とかである。現在自分の子供が母校に世話になっている年となり、老いを感じ始めたと思っていたが先生方に生き方を又教えられた感じがしている。

同窓会では高校の頃勉強より可愛いアイドルに会えることを楽しみに通学していた瑞々しい胸のトキメキを思い出させてくれる。この時は、五十代となった今でも確実に十代に戻れる。そんな青春を買いに次回の会費をためるつもりである。

宮地輝明

高二十一回

「卒業二十周年
記念同窓会を」

中津高校を卒業して今年は丁度二十年目に当り、月日の経つのは本当に早いものだと自分の年を改めて感じました。少し前、中学校の同窓会で懐しい友らと久しぶりに出会いましたが、その時「高校の同窓会も是非やりたいね。」と話し合いました。

というのも私達のクラスは卒業して二、三年後に一回同窓会を開いたきりで、今日に至る迄、全然音信が無いのです。私の近辺にも何人かの同窓生はいるのですが、親しかった友達などの消息は全然わかりません。

さて、私のこの二十年間を振り返ってみますと、昭和四十五年卒業と同時に十六銀行へ入社しましたが、当時の銀行はいつも帰りが遅く、「習い物もできない。」と心配していた両親の勧めで市役所の中に事務所を持つ森林組合へ転職しました。そして高校では全然習わなかった簿記を苦労して先輩から教わり経理を担当したのです。

途中、育児の為三年程退職して家にいましたが、又、森林組合へ再就職させて頂き、簿記の試験も受けて、経理の仕事を自分なりに頑張ってみ何とかこなしながら現在に至っています。家族は私の両親と夫、子供二人の六人住いです。共働きというので本当にあわただしい毎日ですが、何とか今のところは平和に暮しています。さて二十一回生で誰か有志の方に是非、卒業二十一周年記念の学年同窓会を開いて下さる様お願いしたいと思います。期待して居ります。

高二十八回

加藤美代子

五十一年度卒業生で活躍されている方は多いが、その中で、私が知り得た二人の方について紹介したいと思う。

石田昇氏。名古屋芸術大学彫刻科卒業、武蔵野美術大学大学院で学ばれた後も、製作活動を続けられ、一九八七年十一月、日展に初入選（彫刻「裸婦」）。一昨年はヨーロッパ、メキシコへ出かけ、異文化に触れられた。その影響下に作られた彫刻「ケ・ボニータ」が、一九八九年の日展で二度目の入選を果たした。現在は中学・高校で講師をしながら、製作に没頭しておられる。

藤原聡子氏。市民病院に五年間勤務されたあと、三重大学（人文学部）に入学された。高校時代から向学心の高さが際立っていたが「自分をより大きくしたい」という願いで大学に進まれた。その意識の高さには敬服する。現在三年生で、「一般教養は狭くなっていた視野を広げてくれておもしろい。」と言っておられた。専攻は中国文学で清朝の作家について研究したいとのことであった。

和田寛

六・三・三制教育改革渦中の青春
―高校特一回生座談会―

この座談会を掲載する前、本年一月五日にご逝去されました山崎治雄先生に全員慎んで哀悼の意を表します。先生はアメリカ教育使節団の報告書の出ました昭和二十一年から二十四年三月まで、いわば日本の教育の激動期に、中津高女と中津高校の校長として多くの困難な問題を次々解決され、今日の中津高校の基礎を固められました。

中津川駅前にて

司会　「昭和二十四年三月、中津高校を卒業しました私たちは、『旭陵だより』発刊に際して、占領下の日本の教育改革の激動期に生きた多くの想い出を、今ここで語り合ってみたいと思います。Aさんからどうぞ。」

A「まず昭和二十一年の何月だったか記憶がはっきりしていませんが。運動場は畑になっていて、食糧事情のもっとも悪い時代、突然岐阜県の教育担当官のガスタフソンというアメリカ人が日本人の通訳を伴って学校に乗り込んで来ました。山崎校長と女性の先生三名が応対し、ざっと一通り学校の調査をして帰ったことがありましたね。」

B「そう、そのとき『ガスタフソン』という人が制服はダメとか髪の型も自由にしろとか、いったという話を後で聞きました。」

C「まあそれが最初の調査だったようですね。国史や修身のテキストもしらべて行ったとか。」

D「その後しばらくして、教育をもっと自由にしろ、男女共学にしろとかいって命令が来て、先生たちがむしろ困ったり驚いたり。」

E「とにかく日本の占領は間接統治の方式で行われたので、日本政府の背後に占領軍指令部がいて、文部省の背後には指令部の民間情報教育局（ＣＩＥ）がひかえ、文部省の役人は自由主義教育の説明係。」

D「デモクラシーなんてわからない先生がいっぱい居て、職員室の話題は生徒につつ抜けだったですね。」

F「今の高校生と違って私たちずい分せていると思いません？情報集めて、校長室へ押しかけて、時間割変更しろ、英語の授業増やせとかやったわね。」

G「それでしばらくして、六三三制になるという話が出たのですが、まだ案の段階で、新聞などに出て、旧制女学校で卒業した人も多かったし、旧制の専門学校に入学した人もあったりして。」

A「どうなるかわからないね。第一名称をどうするか六は小学校でいいとしても、中学は下級中学、上級中学、そして大学というか。」

B「だから昭和二十四年卒業の私たちの中に旧制の専門学校へ入学金を納めてキャンセルし、新制で行こうという人も出たりして。」

C「とにかく学校が無政府状況で自由で、山崎校長は東大の経済学部の出身だったから、自由主義者で『オープンポリシーで行きます』と宣言したというから。」

C「先生たちがどう教育していいかわからないし、テキストもへたな物使うと占領軍からにらまれるし、だから数学や物理などは決まっていてよいとしても、問題は文科系特に歴史これは問題でした。」

C「私たち、もう学校あてにしないで家にある文学全集や、岩波文庫をむさぼるように読みました。勉強はその方法よりないしね。」

E「それから食べる物がないからお腹が空いて昭和二十三年のはじめ頃、やっと一軒、中津の西太田町の瓢々がサッカリンつかったおしる粉屋はじめたというので、よく体操や裁縫の授業を抜け出して。」

旧丸八邸の間翁の像

A「それで誰か校門の所で捕まった人あったでしょう。（笑）」

B「裁縫で思い出したけれど、被服と云ったかしら、とにかく、家で母親に習えるものなど学校で習わなくてもいいから、もっと英語や数学の遅れを取り戻して来るかもしれないと旧制高校並の授業の準備をはじめて、放課後、カントやデカルトを流したり、フランス語の授業もあったり。はりきったわね、さつまいも食べて、夕方までドイツ語やったり。」

G「数学も高等数学の練習、たのしかったなー。積分や微分の初歩、でも高等学校になってからは解折ⅠとⅡというきちんとしたテキストが出て。」

E「国語もテキスト出るまではS先生の雨月物語、テキスト出た後も副読本で源氏物語やったでしょう。」

F「先日高等学校で使ったチャールス・ラムのシェイクスピア物語やドリューム・チルドレンの話を私の娘にしたら娘はびっくりして、高等学校でやったの？出ても難しいといって尊敬していました。」

A「話はもどりますが、校舎の話と名称ね、中津高女は新制中学に開け渡してくれと内々話が出たことを、例の三人の先生から聞いて、私たちは何日も話し合いをしたでしょう。そしたら、Ｉ先生が隣で聴いていて教員の中でもそれでもいいという先生が居る、難しいこと教えなくてもすむからと情報提供してくれて。」

F「そうそう、Ｉ先生熱心だった。私たちに今から市長の自宅へ請願に行けと云って、言葉使いも教えてくれたわね『伝統ある中津高女の文化の灯を消さないで下さい。実業高校でなくて普通科の高校になるようにおねがいします。』」

A「アナーキーというか自由というか、あれほど先生と生徒が団結した時期はなかった。」

B「しかし反対の先生たちにはにらまれていた。」

C「なぜ反対かというと、中学なら校長になれると思っている先生が居たそうですよ。」

D「とにかく、実業高校なんて名称もだめ、中津高女は普通科を中心とする高等学校になることを目的にいろいろ運動したでしょ、下級生にも呼びかけて、市役所や市長の自宅の前に座り込み、代表が中に入って市長と直接交渉、当時は市岡市長で鼻眼鏡をかけ、パイプをふかしながら、私たちの話を聴いて下さり、『明日県庁へ行ってくる』という返答をもらった。一安心して全員引き上げました。これは本当に成功しましたね。商業には悪いけれど先手を打っちゃって。」

G「それでいよいよ中津高等学校という名称でスタートしたのが昭和二十三年四月、一期生はわずか三十二名。この時期程楽しかったことは以後ありませんね。胸がおどって、しかも時間割が不満といって、又山崎校長先生を説得し、作法でなく倫理に変えて下さい。生意気ねー。」

現在の茶屋坂

A「山崎校長先生は昔の旧制高校の古いノートを持っていらっしゃって、『倫理は私が授業しますドイツ語でカントの純粋理性批判の一部を黒板に書き訳を付けて下さった。嬉しかったわね。」

E「何とか形が出来上がったところで、民族の大移動みたいに工業高校と商業、農業の中津高女への引越しがはじまったでしょ、夏の暑い日、私たちも机や椅子を運ぶの手伝って、歓迎会もしたでしょ。」

H「しかし九月からの共学の授業は工業と一緒でしたね。」

B「そう、いよいよ男女共学。先生たちが心配するやらあわてふためくや。」

A「漢文の白木先生、物理の花田先生、など新しい先生に教った。」

D「あの頃先生たち研究室として個室を持って、化学なんか研究室で教わったでしょう。」

E「統合されて、先生同士なじめなかったのではないの。それと、全科目選択制だったから、占領軍の命令という大義名分というか、私たちには甚だ都合よかったわね。Gさん生物選んだ？」

G「生物は丹羽先生。これはよい授業だったけれど、女性は女らしくの方でね。」

F「音楽は最高に楽しかった、園田先生が原流でドイツ・リード教えて下さってまるで学校がいっぺんに明るく華やかになって、汽車で二時間もかかって通学することが何とも告でなくて声学のコンコーネを大切にカバンに入れて。」

B「先生の研究室があるからよくお餅を食べたりお茶飲んだり。それでT先生は解折Ⅱのテキストに難色しめしてた。」

A「どうして？」

I「積分や微分を教えるのはじめてだって。一寸かわいそうだった。もともと女学校の先生として来た人だから。」

C「男女共学は九月からスタートしたけれど、別に生徒同志の問題はなかったね大人の心配のしすぎ、むしろ先生の間で恋愛問題は多発していましたよ。（笑）」

A「私は新聞部だったから『高等学校本決まり』などという大見出し一面トップ記事で、特集組んで、今考えるとあれが第一号かな。」

I「そう、W先生が君たちのことをトロッコというのだ、なぜならジャーナリズムのレールには乗っているが汽車（記者）ではないとずい分洒落を飛ばして。」

E「漢文も白木先生がはじめから『帰去来の辞』それらも何とか読めるようになって嬉しかったわね。」

D「混乱期なのに先生たちも授業はしっかり本学の学問をやったという感じね。」

F「よく遊びよく学び、社交ダンスを正科に入れろという民間情報教育局の指令が出ていると或る先生からの情報で、私たち、『わー、ダンスしよう』」

G「体操の時間にやったでしょ」

H「ついにダンスホールに足を延ばした人もいたわねえ」

C「昭和二十三年の秋頃でしたか、いずれ恵那高校と共に学区制になるから今から交友を深めようというので、文芸座談会とか音楽会が開かれたことを覚えている？」

G「そうそう、恵那高校の幸脇先生とか日影先生という方々が、中津高校に来られ、洒落た話をしたり、ハンサムだといって騒いだりしたでしょう。」

H「とにかく受験勉強とか偏差値などというもののないよき時代で、旧制高校のムードも少し真似して、今考えると夢の高校生活でした食糧の乏しいことなど精神さえ豊かならば何でもないことを体験した時期でしたね。」

司会　「ありがとうございました。」

出席者　中津高校特一回卒業生
伊藤瑠都子　木原久美子
郷原　達子　菅井　深恵
杉山　千保　曽我　定子
田本　愛子　千村　恒子
永野　博子　アイウエオ順

（この座談会は平成元年九月開催したものです。）

旭陵会総会

平成元年五月十四日の総会に於て二年度の総会の持ち方について話し合われ次のように決定しました。

期　日　五月十二日(土)
　　四時より
場　所　勝　宗
　　（中津川駅前）
会　費　五千円

二年度の総会はこのようにパーティ形式とし、多数の同窓生の参加が期待されます。

なお幹事として郷原幸夫副会長（四回生）、青木敏夫（六回生）を決定しました。

“高橋　照子先生”感謝の集い
―音楽部（合唱部）同窓会のお知らせ―

拝啓　年度末のお忙しい中皆様にはお変わりなくお過ごしのことと存じあげます。私たちの恩師高橋照子先生が中津高等学校を退職されてはや20数年の歳月がたちました。

私たち高校在学中には音楽部に籍し高橋先生の下で楽しい合唱指導やら幅広い音楽の指導をうけました。先生にはまだ第一線でご活躍中ではありますが、私たち音楽部に籍したもので今までのご指導に感謝するとともに先生のご長寿を祈り、ご壮健を祝福もうしあげたいと願うものであります。

つきましては、同窓の諸兄と相はかりまして下記のとおり感謝の集いを開催することといたしましたから、何とぞお繰り合わせのうえご出席をお願いいたします。

敬具

発起人代表　長瀬　幸雄

記

名　称　高橋照子先生感謝の集い（音楽部同窓会）
日　時　平成２年８月12日（日）午後３時より午後７時まで
場　所　高砂殿（中津川市手賀野　☎66－7788）
会　費　¥8,000予定

発起人代表	長瀬　幸雄	中津川市新町1-15	☎65－3052
発　起　人	青木　敏夫	〃　手賀野621-4	☎66－5012
〃	安保　寿子（渡辺）	〃　駒場1653-76	☎65－4031
〃	前田　青甫	〃　花戸町4-7	☎65－2070
〃	安江　忠城（林）	〃　駒場1350-102	☎66－5331
〃	管井　延郎	〃　東宮町8-32	☎65－4046
〃	渡辺　洋子	〃　落合849	☎69－3225
〃	谷中　横子（伊東）	相模原市相模大野1-7-1	
〃	佐々木　操（斎藤）	南安雲郡豊科町大字高屋1137-31	
〃	桃井　健示	中津川市落合716-5	☎69－3018
〃幹事	勝野　正彦	〃　中一色町3-61	☎65－2731

尚、詳細につきましては発起人までお問い合わせください。

平成元年(昨年度) 進路状況について

進路指導部

昨年秋に始まった推薦入試も激戦のうちに一部新設大学を残して終了し、今、丁度私立大一般入試の受験のための中津高生も西へ東へと受験行脚の毎日である。国公立大の入試制度が目まぐるしく変わり、受験人口も急増してここ一二年で大学受験地図が全く塗り変えられそうな状況に至った。

さて、昨年春の(平成元年)入試というと、いよいよ入試競争の激化が始まった年で、今年の前兆がある程度感じられた年でもあった。「度中津高校も選抜コース第一期生を激戦の中へ始めて送り出し、その実力が試されることになった。

私大入試については、外国留学から帰った生徒たちが、英語力を生かして、早大、津田塾、明治、中央、南山など有名私大や愛知県大などの外国語学部にも合格でき、本校の英語コースの力がかなり認められることになった。

一方、国公立大においては、合格者数において過去十五年来最高の四十九という数を挙げることができ選抜コースの目標を一期生としては達成することができたのではないかと考える。

今春卒業予定の学年は厳しい推薦入試に挑戦し三重大、新潟大、信州大など国立大に五名の合格者を既に出している。

一般入試においても必ず良い結果を出してくれるものと大いに期待している。

学校別合格者数

延べ人数（　）内は過年度卒内数

［国公立四年制大学］

大学名	61年度	62年度	63年度	大学名	61年度	62年度	63年度	大学名	61年度	62年度	63年度
岩手大		1	1	山梨大	1(1)			高知大		2	2(1)
秋田大		1(1)	1	信州大	6(1)	4	4	熊本大		1	
山形大		2(1)		静岡大	5(2)	3	3	琉球大	1(1)	1(1)	
福島大		1	2	愛知教育大	2(1)	1	3(1)	高崎経済大	1		
茨城大	3(1)	1		名古屋大	2			都留文化科大	1	2	8(1)
埼玉大		2		岐阜大	4(1)	3	2	静岡県立大		1(1)	1
千葉大		2		三重大		4(2)	2(2)	愛知県立大		1	3
東京芸術大	1(1)	1(1)		滋賀大	1			大阪府立大	1		
新潟大	1	5(1)		大坂外語大			1	山口女子大			2
富山大	3(1)	3(1)	4	和歌山大			1	群馬県立女子大			3
金沢大	2(1)		1	鳥取大		1	1	下関市立大		1	2
福井大	1	1(1)	2	山口大		1		計	36(11)	46(10)	49(5)

［私立四年制大学］

大学名	61年度	62年度	63年度	大学名	61年度	62年度	63年度	大学名	61年度	62年度	63年度
旭川大		1(1)		早稲田大	1(1)		1	四日市大		5	1
札幌学院大			1	神奈川大	1	1	4(3)	大谷大	1(1)		1
北海道東海大			1	関東学院大	1(1)	1(1)	1(1)	京都外国語大	1		2
東日本学院			2(1)	相模工業大	1(1)		1(1)	京都産業大	2(1)	1	
東北学院大	1(1)			横浜商科大	4(1)			京都学園大		1	5
いわき明星大	2			新潟産業大			1	皇学館大		3	
足利工業大	1(1)			金沢経済大	2(1)			光華女子大		1	1
麗沢大		1		金沢工業大	12(3)	15	12	橘女子大			2
亜細亜大	1			北陸大	1	1	3	同志社大	2(2)	1(1)	
駿河台大	1(1)			福井工業大	7(1)	2	7	花園大		1	
桜美林大	1			山梨学院大		2(1)	2	立命館大	1	1(1)	7(2)
独協大			1	長野大		5	6	竜谷大	1(1)	1	
否林大			1	岐阜経済大	4	5	3	姫路独協大		1	
慶応義塾大	1(1)			朝日大		3(3)	1	福山大		2	
工学院大	1(1)	1(1)		岐阜女子大	2	3	5	奈良大		1	
国学院大		1	1	東海女子大	3	2	3	奈良産業大		1	
駒沢大	1	1(1)	1	聖徳岐阜教育大	6(1)	5	6(1)	岡山理科大	4	3	
実践女子大	1(1)	1		愛知大	9(2)	8(2)	4(1)	大阪学院大	1	1	1
北里大		3(1)		愛知学院大	12(2)	20	16	大阪経済法科大	1	1(1)	1
明星大		1(1)		愛知工業大	4(1)	5	8(1)	大阪芸術大	1		5
専修大	2(1)		1	愛知淑徳大		1		大阪工業大	1(1)		1(1)
創価大			3	金城学院大	1			大阪産業大	2(2)		
大正大			1	椙山女子学園大	1	3	1	大阪電気通信大	1(1)	2(2)	
大東文化大	2(1)	1(1)		大同工業大		7(2)	1	関西大	2(2)		2(1)
拓殖大	1		1(1)	中京大	3(3)	6(2)	7	近畿大	1(1)	1	1(1)
中央大	1(1)		3(1)	中部大	4	7	5(1)	関西外語大	2	1	
津田塾大			1	同朋大	1	7		摂南大	1(1)		
帝京大			1	名古屋音楽大			2(1)	帝塚山学院大	1		
東海大	6(2)	3(1)	4(3)	名古屋学院大	4(1)	6	12	桃山学院大	1(1)		
東京電機大	1			名古屋経済大	2(1)	2		国際仏教大			1
東京農大	1(1)	1(1)		愛知学泉大		2		英知大			1
東京家政大			1	名古屋芸術大	2	3	1	甲南女子大			1
東京理科大		1(1)		名古屋商科大	3(1)	3	2	神戸学院大	3(3)		1
東洋大			1	名古屋女子大	1	4	5	神戸女子大	1	1	
日本大	7(5)	2	1	名古屋外国語大			3	九州産業大	1(1)		
日本体育大		2		藤田保健衛生大		4(1)		九州共立大			3(1)
日本文化大			1	南山大	3(1)		4	西日本工業大	5		2
法政大	1(1)		2(1)	日本福祉大	4(1)	9(2)	3	日本文理大			1
武蔵野美術大			1(1)	名城大	12(6)	14(6)	10(1)	第一工業大	1(1)		4(1)
明治大	1	1(1)		中京女子大		1					
明治学院大	1	3(1)	1	松坂大	5	1	7(1)	計	189(66)	212(37)	222(27)

［国公立短大］

大学名	61年度	62年度	63年度	大学名	61年度	62年度	63年度	大学名	61年度	62年度	63年度
群馬大工業短	1			静岡大工業短	6	2		名古屋市立保育短		1	1
埼玉県立衛生短		1		静岡大法経短			1(1)	三重短		2	1
神奈川県立外語短		1		岐阜大工業短	3	1		三重県立看護短	1		
金沢大医療技術短	1			岐阜市立女子短			1	滋賀県立短	1	1	1
石川県農業短	1			愛知県立看護短			1	奈良県立短	1		
大月短	3			名大医療技術短	1		1				
長野県短	2		2	名市大看護短		1					
信州大医療技術短	1		1	名古屋市立女子短			1	計	22	10	11(1)

高校三年間をふり返って

平成元年度卒業生　宮地　直未

中津高へ入学し、部活に入って、「部活と勉強との両立」を目標にやってきました。

部活はバスケット部に入って、「さぁ、がんばるぞ。」というような意気込みで始めましたが、実際は、家に帰れば眠い、それでもがんばってやろうと思うけれど睡魔には勝てずに眠ってしまう、という生活が、一、二ヶ月続き、少しずつ、予習のやり方などの「こつ」がわかってくると、今まで、時間に余裕がなく、あわただしかったのが、少し生活に余裕がでてきました。そこで、そのあいた時間が、他の勉強にまわればよかったんで、まだ何も考えていない一年生だったので、その時間は全て睡眠で終わってしまいました。

とにかく、両立なんて私にはとても無理だと思ったので、何か決めてそれをやろうと想い、テストに落ちない事と、予習をしっかりやる、ということにしました。初めは小テストも落ちないようにしていたんですけど、きっと無理だろうと思い、習得などのテストだけにしました。

テストは、試合の次の日にあったりすると、大変で、予習などを少し前から余分にやっといて、そのテストの勉強だけを前の日にやったりして、どうにか、テストは一つも落ちないできました。予習は、というときちんと全部やってくる日もあれば、少しできなかったりした時もあったりして、だめだったけれど、自分なりにがんばれたので、よかったと思います。

でも、目標を立てて、できたのは、部活をやっていたからだと思います。部活があったので、限られた時間の中で、自分のできるだけのことをやる、という習慣ができました。でも、限られていない、夏休みとかになると、まだいいやという気持ちになってしまって、なかなかできませんでした。

この高校三年間は、「あっ」という間に過ぎてしまい、あれをやっておけば、などと後悔する事もたくさんありますが、部活や友達からもたくさん学んだし、勉強も自分なりに一生懸命やって、納得できる三年間だったと思います。

母校へ絵画を寄贈

後藤　利夫氏(十三回生)

後藤利夫氏より「青少年労働者の教育」(写真)の絵画の寄贈を受けました。

氏は本校卒業後武蔵野美術大学実技専修科で学ばれ、八十周年記念芸術展にも、「木曽川より馬籠峠を望む」「人を村を島を返せ！」「民族解放」の三点の作品を出品していただきました。

ペンと水彩による「青少年労働者の教育」は単彩の中に働らく青少年の姿が生き生きと描かれている意欲作である。図書館に展示させていただいております。

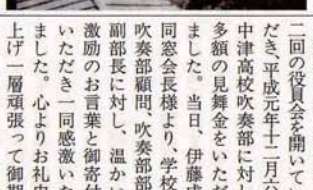
尚これで本校所蔵の芸術作品は前号掲載分にあわせ十二点となりました。

『吹奏部室の焼失』

平成元年七月十日午後十時三十五分頃中津高校吹奏部室から出火し、木造平屋建一八三平方米がほとんど全焼しました。消防署と警察署の合同現場検証の結果、「出火原因については確証が得られず、不審火」という認定が出ました。評価額で建物が約百三十万円、楽器他が約二百四十万円でした。この建物は昭和二十七年八月に図書館として建てられ、昭和五十二年三月まで、二十五年間本校の独立図書館として使用されたものです。その後、内部を改造して吹奏部の練習場兼部室として利用されてきましたが、建築後三十七年間の間に老朽化し、補修を重ねて使用されていたものです。吹奏部は、七月二十三日に中津川文化会館で第二十回定期演奏会を行う予定で連日練習をしていた矢先の災難で、練習場、楽器、楽譜の大半が焼失し、一時は呆然としましたが、学校内外の多くの人々の物心両面に亘るご援助そして温かいご激励により、災難を乗り越え、八月十日に演奏会を開くことができました。この間に各方面から寄せられた御厚情に吹奏部員はもとより学校職員生徒一同感激し、深く感謝致しております。吹奏部定期演奏のために他校からは楽器貸与の申し出があり、また次の方々が高価な楽器を寄贈して下さいました。

恵那金属(株)様、田中吉徳様、早川千里様、鈴木千里様、召田清治様、鈴木孝様、吹奏部OB様。

その後学校では吹奏部再建委員会による再建計画に基づいて、第三校舎北側の倉庫を改造し、十二月十六日には工事も完了しました。吹奏部は十二月から新しい練習場で活動を開始しております。



焼けた吹奏部室(旧図書館)

お礼の言葉

学校長　杉山　仁

この度焼失いたしました吹奏部室は、同窓会会員の方々にとって想い出に残る最後の木造校舎でした。不審火とはいいながら責任者として痛恨の気持ちで一杯であり、心よりお詫び申し上げます。

新しい練習場の建設や楽器の購入につきましては、県当局、PTA、吹奏部OB等多くの方々の御援助をいただきましたが、特に同窓会では、お忙しい中、二回の役員会を開いていただき、平成元年十二月六日、中津高校吹奏部に対し、多額の見舞金をいただきました。当日、伊藤成章同窓会長様より、学校長、吹奏部顧問、吹奏部部長、副部長に対し、温かいご激励のお言葉と御寄付をいただき一同感激いたしました。心よりお礼申し上げ一層頑張って御期待に答えたいと存じます。

新しい吹奏部室

お知らせ

中津高校同窓会

昨年七月十日吹奏部部室火災による被害から部活動を再生する為関係者からお見舞いを頂きました。当同窓会も寄付金を贈呈することとし、一応の部活動継続の体裁を整える事が出来ましたものの最近向上した他校の楽器と質的レベルにかなりの格差のある事は否めません。昨年当同窓会役員会に於て寄付金の決議がされた際、吹奏部の為の募金活動を今後継続して行こうとの決議がされましたので、会員各位の御理解と御芳志を謹んでお願い申し上げます。

おねがい

旭陵だより編集部

本紙第三号発行のはこびになりました事欣快にたえません。

さて本紙は一万数千名にのぼる同窓生全員に配布致しておりますが、送料が相当額になります。今後本紙を継続して発行する為応分の費用負担を会員各位にお願い致したく謹んでお願い申し上げます。

編集後記

「今度の旭陵だよりは君に頼むよ。」と吉川さんに云われたのは、中学校PTAの関係で、会社へ御礼に伺ったときだった。「はい。」と答えたものの、「これは困ったなあ」が実感であった。

中味があって面白い新聞をつくるなど、からっきし自信がないからであった。

ただ、どこにでもあるような型にはまった紙面づくりはしたくないものだとも思った。

そこへ飛び込んできたのが、末松博士の東工大学長就任のニュースであった。これで第一面の目玉ができたとほっとした。山田彦彌氏をはじめ各界で活躍の方々に投稿頂きグレードをあげることもできた。

追試を受けなくてもいい程度の点数は貰えるとかってに自己満足している所です。

原稿をお寄せ頂いた方々に御礼申し上げます。

(仁科)

吹奏部へ見舞金贈呈

旭陵だより編集委員

(委員長)　吉川　光彦(5回生)
(副委員長)仁科　吉介(15回生)
(委員)　青木　隆子(1回生)
花田　玲子(2回生)
小池　広中(15回生)
酒井　史朗(18回生)
梅村　薫(12回生)
早川　章衛(8回生)